

氏名(本籍)	やま な しょう じ 山 名 章 二 (東 京 都)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 1808 号
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	The Writer and the Sinner : Dialogic Readings of Eugene O'Neill's <i>Days Without End</i> , <i>The Iceman Cometh</i> , and <i>Long Day's Journey into Night</i> , with a Transcript of the "4th" Draft of <i>Days Without End</i> (作家と罪人—ユーージン・オニール著『終わりなき日々』、『氷人來たる』, 及び『夜への長い旅路』の対話的解釈, 付『終わりなき日々』「第四」稿翻刻)
主 査	筑波大学教授 森 田 孟
副 査	筑波大学教授 博士(文学) 荒 木 正 純
副 査	筑波大学助教授 文学博士 鷺 津 浩 子
副 査	筑波大学助教授 博士(文学) 宮 本 陽一郎

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、アメリカ人として二人目のノーベル賞受賞者(1936)となった劇作家ユージン・オニール(Eugene O'Neill, 1888-1953)の晩年の作品と言っていい*Days Without End*(『終りなき日々』1934, 以下*Days*と略記), *The Iceman Cometh*(『氷人來たる』1946, 以下*Iceman*)及び*Long Day's Journey into Night*(『夜への長い旅路』1956, 以下*Journey*)の三作を取りあげて、各々の詳細で入念な読解と、*Days*の残存する全ての草稿、覚え書など未刊の数々の資料の徹底した調査・研究によって、この三作が*Days*に始まる三部作であり、前作では扱い切れなかった主題を次々に次作で取り上げて追求したものだという新しい見解を示すと共に、今後の研究者の便宜のために、*Days*の新たな校合・校訂テキストを作成して付加したものである。

著者は、この三作に共通する、作中人物における書く行為と人生との対立、及び、劇作家自身の創作と実人生の対立という、この両方の「対立」の間に相関を見出し、戯曲作品と作者の伝記の双方を対話的に読み直して、この三作各々の従来の定説とは異なる新たな解釈を提示し、それによって新しいオニール像の提出を、すなわち、従来のこの作者の伝記の一部書き換えまでを示唆することになった。

本論文の構成は、以下のとおりで二部から成る。

#### Part I

Introduction

Chapter 1 : Fury of Guilt Barely Dodged : Juggling with Endings in *Days Without End*

Chapter 2 : Vengeance of Art and Admission of Guilt : Confronting the "Dead Wives" in *The Iceman Cometh*

Chapter 3 : Fleeing into *Long Day's Journey into Night* Haunted by Kathleen Jenkins O'Neill Conclusion

Works Cited and Consulted

#### Part II

Position of the "4th" draft of *Days Without End* : an Introductory Note

A Transcript of the "4th" draft of *Days Without End* 152 leaves

第一部が本論文の論文としての主要部であり、この第一部の成立に大いに貢献した*Days*の「第四」草稿（実は残存している最初の草稿）を、それ以後の第五～第七草稿、及び、現行の決定稿と校合・校訂して、この作品の成立過程が一目瞭然となるように著者自らが作成した新しいテキストと、その意義を表明した序の覚え書とから成るのが第二部である。この第一部と第二部とが相補的に一体となって本論文の全体像を示す構造である。

第一部、序論は、本論の成立についての説明で、David Bleichの主観（体）批評に依拠するものであること、Ernest Grassi, Peter Brooks、及び、中村雄二郎の示唆・影響を受けたことが述べられ、本論文の鍵語としては、「詩人の血」、作中に主要な存在として現われる「作家」人物、創作と罪ある実人生、批評（分析）と伝記、が挙げられるとして、それらが作品の新たな主題発見への力動性に富む方法を構成していると説く。

第一章は、*Days*の読解を、全ての草稿、未刊資料の精査に依拠しながら、この作品の主題の、消滅・出現、強・弱などの変遷の状態に注目しつつ展開する。その結果、*Days*は、最後には夫が回心らしき言動を見せて妻にも許され、愛が取り戻される、という結末が強く浮上することになる。これは、オニールがカトリック回帰願望を形象化したものだという従来の観方よりは、むしろ、作者が自らをキリストと同一視し、愛を奉る宗教を宣言していると読めることになり、この作品は、作者が二人目の妻との葛藤を描いたのだという新説を出す。

第二章は、*Iceman*を扱う。この作品は、*Days*の「続篇」なのではないか、という著者の着想を、テキストの入念な読解と未刊資料の精査とによって実証してゆく。*Days*が、前章での読解ではどうしても、作者が愛に殉じた自分をキリストに模して自己正当化を試みた作品ということになるが、愛に殉じたのだなどと自らを看做すこと自体に、二人目の妻に不倫を働いた罪を慫よく「ごまかして」逃れようとする欺瞞が見えるが、それを*Iceman*は認めて同じ問題を再度取り上げたのであり、前作では早く取り扱いをやめたしまったもう一つの問題—最初の妻と子供とを棄てたという彼女への負い目も、作中人物のHickeyに托して取り組んだのだと読む。この人物は、*Days*に登場した、自己を模範として人類を救う宗教を宣言した人物の再来として友人を救おうとする存在である。Hickeyは救済の指針とする自らの体験を「自分が書いた本」と呼んでおり、この彼の行動は明らかに、書くことによる現実操作である。こうして、前作から持ち込まれた「書くこと」を扱って技法上も一部の解決を見せているが、最初の妻への負い目は結局ちぐはぐな結末をつけられたHickeyの「本」が示すように、未解決のままに終わる。二人目の妻の問題は、老若二名の旧活動家という登場人物が共通の過去を確認する過程を分析することで、解決に到っていると読み解く。*Days*で「書くこと」が突きつけた、裏切りの代価は、死か悔いに苛まれる生だとする真実を、*Iceman*ではParittとLarryの二人がそれぞれ体現しているのであり、ここに、二人目の妻をめぐるオニールの正直な自己対決とその表現の完成が見られる、と著者は説く。結局、*Iceman*は、人間の実存を哲学的に思索した作品だという従来の定説とは異なり、作者が自分の二人の（最初の二番目の）妻との葛藤を描いたものなのであり、半ばは成功して、二人目の妻との問題は解決した作品だと結論づけた。

第三章は、*Journey*を取り挙げる。この作品には、作者の現在の三人目の妻への献辞が付されており、この戯曲は「母の劇」であり、「自伝」なのだとする作者自身の言明がある。ここにこそ、*Iceman*では扱い切れなかった最初の妻との問題への対処が絡んでいると見た著者が、この直感を実証してゆく。この作品は、作者の言明も与って、従来「自伝」として読まれてきたが、何しろ影の薄い若い人物の一日を描くのみで、どうしても「自伝」としての説得性がないと論者は見て、献辞にあるとおりに、オニールを含む家族をモデルとした「死者との対面」を、伝記に照らしながら検討してゆく。その結果、この戯曲は、確かに圧倒的に「母の劇」であることが判明する。

更に、オニール劇に類出する「放蕩者の帰還」という型と、「他者の中に自己を見る」という枠組、及び、*Days*以来の「〈本〉が真実を暴く」という仕組みに照らして検討を続けた挙句、この「自伝」の中で漠然と帰還した影の薄い放蕩者は、この作品が圧倒的な「母の劇」であることも相俟って、作中で扱われる時期に相当する作者の実人生で進行中だった離婚訴訟の相手である最初の妻を捨ててしまったことを隠蔽する造形だ、という結論に達する。*Journey*は、従来の定説のような、中心人物を古典的に悲劇に再生した作品ではなく、オニールが最初の妻との関わりを何とか処理しようとして結局は扱い損ね、その問題を空白にして作中に隠したものだという新説を

出した。

結論では、オニールが、彼の生涯の最大の罪である、最初の妻と子供を棄てたという問題との直面を造型した *Journey* を巡って、「書くこと」と「許し」の儀式を実人生で演じていることに注目する。彼は、この戯曲を「本」として、「外枠」にあたる場で、三人目である現在の妻に読ませたのである。彼女は夫を「理解」したことを自らの日記に記している。オニールは、この「儀式」を通して、*Days* にもあるように「自分自身」を許したのだと思われる。彼は最初の妻を逃れ、*Journey* という「本」に逃げ込んだのだ、と論者は見る。更に、晩年のオニールが現在の妻（三人目の）をママと呼び、慰めを求めたという事実を、彼が21歳の頃に最初の妻と子を遺棄して母親の許に帰ってきて彼女に慰められたというあの、伝記の伝えある放蕩者の再現だと説く。結局、彼のこの時の罪悪感、「書かれること」によって真実として結晶することを拒み、オニールに生涯とり憑ことになるのだと論者は見る。本論文は、以上のように、草稿読解を端緒として、作者オニールの伝記上の事実を対象の三作品と対話的に照射し検討しながら詳細な読解を展開して、この三作それぞれを新しく読み直したものである。本論文のように、戯曲の創作によって作者の実人生の把握と操作を行ったものだと作品を読み直すと、作者オニールの内面を一層暴き出すことになって、従来の伝記にみられるオニール像が変わることにもなる。本論文の三作品の読み直しによる新しい読解によって、オニールは、生涯、最初の妻と子に対する罪の意識に苦しめられ続けた人物としての姿が浮上する。これは、ノーベル賞受賞後、ますますアメリカ演劇界の巨匠として、晩年パーキンソン病に苦しんだとはいうものの、自足したと見られる現行の伝記の一部書き換えを有力に促すことになるであろう。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、多作・豊饒な劇作家オニールの最後期に属する三作品を、残存の草稿全てと未刊の資料を精査・検討し、伝記との対話的思考を駆使して、実は作者自身の三人の妻との関係とそれに対する作者の内面の思いを形象化した一連の「私小説」「自伝」だと見る、従来とは異なる新しい読解を提出して十分に説得力がある。長年のオニールに対する著者の親昵ぶりと、独自の感性と直覚を頼りにしながら作品を詳細に客観性を失わずに読み解こうとする姿勢とが、立派な英文の駆使と共に本論文を優れたものに仕上げさせた理由であろう。

但し、序論で表明される方法論と各章の論述や内容が必ずしも全て合っているとは見えないことや、各作品の読解に当って、作品相互や伝記との「対話風」の思考が入り組んで論証が分かり難い箇所も若干ある。先行の研究は十分に踏まえられていて申し分ないが、本論文の、オニール研究に占める位置付けについての展望に些か欠ける感みもある。また、本論文の新解釈に対しては、作者の私生活との関係づけが過ぎて、本来芸術作品であるものを余りにも矮小化しはしないか、といった、本論文の価値評価とは必ずしも直結はしないかも知れない疑問も惹起しないわけではないだろう。以上のような課題はあるものの、対象の三作品個々の、そして全体の新解釈自体は大変面白く、説得力があり、伝記の一部書き直しを促す論文にまで十分になり得ている。従来のオニール研究に新たな一歩を付け加えたものとして高く評価出来る。更に、第二部の、著者自作の校訂テキストは、今後のオニール研究に甚だ有益なことは間違いなく、それだけでも貴重である。本論文が学会に大いに寄与することは疑いの余地がない。よって本論文は、博士（文学）論文に十分値いする。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。